
それは、意図的だったか

砂漠の砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは、意図的だったか

【Nコード】

N2097L

【作者名】

砂漠の砂

【あらすじ】

主人公は、生徒会の役員。ある日、後輩の女の子がいじめられているのを目撃してしまう。

（前書き）

ゴールデンウィーク中、一日一作品書こうと決めて、今日でまだ2作目です。

決して満足のいく出来ではありません。もっと書くべきとはある。しかし、せっかく書いたのだから、投稿させていただきます。

明王高校、裏庭。

裏庭というにはおこがましく、学校の校舎と敷地を区切るフェンスの間にできた、細長い隙間に過ぎなかった。

生徒会の仕事が終わった帰り、鬼島はそこを見回りに来ていた。なぜか分らないが、トイレトペーパーや食べ残したお菓子などが散乱していることがよくあって、それを片づけるのを日課にしていたのだ。

別に、何か高邁な義務感があるわけではなかった。だけれど、学校はみんなが利用するものだ。綺麗であるのに越したことはないのだ。

だが、今日の裏庭には先客がいた。

女子が五人、着けている校章の色からして、多分一年生だ。

一人の地味な顔をした女の子が壁際に追い詰められて、他の四人がそれを囲んでいる。

「あんた、どんな手を使ったんだよ！」

ひどく不細工な顔をした女子が言った。

「そうよ。何であんな下手くそな絵で、大賞が取れたのよ」

髪のを金髪に染めた一人が言う。

「わたし達にも、その方法を教えてもらえないかしら？」

今度はすらりと背の高い、わりと美人の女の子が言った。思うに、彼女が四人のうちのリーダー格だろう。

「し、知らない。わたしにも分からない。自分でも全然どこがいいのか分からない絵で……」

「あんたが、私達を差し置いて大賞を取るなんて、許せないわ！」

金髪に染めた女の子が、突然ビンタした。

地味な顔の女の子は、顔を伏せてしまう。

「まあ、いいわ。それより、大賞とれたんだから、わたし達にも何か奢ってよ」

「またお金？」

「なに、その言い方は！ 本来、あんたみたいな人間は、友達なんて作れないのよ。それをかわいそうに思って、わたし達がこうして仲良くしてあげてるんじゃない！ そのお礼金として、いくらかもらえるのは、当然の権利だわ！」

美人がそうまくし立てる。あの顔からは想像もできない、恐ろしい声で。

「で、でもわたし、もうお金が……」

「ない？ ないなら別の方法で支払ってもらうしか……」

なんてことだ。自分生徒会役員を務める学校で、こんないじめがはびこっていたとは、今の今まで気がつかなかった。許せん！

「おい、お前ら！ なにやってんだ！ 先生に言うぞ！」

すると五人は驚いて、鬼島の方を見た。今の今まで、彼が近くにいることに気がついていなかったらしい。

鬼島は別におそれを感じなかった。自分は正しいことをしているという自負があつたし、あいつらが何か反撃してきても、所詮は女だ。勝てる自身があつた。

「なによ、あんた」

美人がこの上ないほど冷たい目で鬼島を見てきた。だが鬼島は怯まない。他の三人も鬼島の顔をしばらく見つめていたが、やがて目をそらした。

「あんた、確か生徒会の役員やってる二年生よね？」

「そうだが」

「これはわたし達の問題よ。部外者が口出ししないでくれる？」

美人の、冷酷な低い声。なぜこんな声が出せるのか、鬼島は不思議に思った。

「何を言ってるんだ。お前らが今すぐ止めないなら、生徒指導の先生に言うぞ。そうすれば、最悪お前ら、退学だぞ」

美人は舌打ちした。

「けっ、正義感ぶりやがって。これだから優等生は……」

他の三人も同様に舌打ちすると、その場から去っていった。

残されたのは、地味な顔をしている少女だ。

「君、大丈夫か？ 場合によっては先生に相談した方が、本当に」

だが、鬼島の優しい言葉に、少女の顔はなぜ硬くなった。

「よ、よけいなこと、しないで下さい。あんなことされたら、あいづりますます陰険になる」

「なんだって。じゃあ、俺にあのまま見ていろと？ いや、見ぬふりをしてとつと帰れば良かったって、そう言いたいのか？」

「そうです」

少女は上目遣いに鬼島を睨んだ。だが、その目には涙がにじんでいる。

「……そうだな。普通のことなかれ主義者だったら、そうしたかも知れない。だけれど、俺は生徒会役員なんだ。ああいうことを見過去すわけにはいかないんだ」

「と、とにかく、大げさに騒がないでください！ 先生にだけは言わないでください」

「わかったよ。じゃあ、しばらく先生には言わないよ。だが、もしどうしてもなくなったら、俺に相談してくれ。俺の名前は、鬼島だ。君、名前は？」

少女はしばらくためらったが、口を開いた。

「瓜生忍」

「そうか。瓜生さんか。さっきの会話で、美術の賞を取ったって言うってたけど、絵は上手いの？」

「いいえ、全然上手くありません。……じゃあ、失礼します」

そう言つと少女は、校門の方へ走り去った。

鬼島は踵を返すと、職員室へと向かった。

そう言えば一年生の6月頃だったか、写生大会があるのだった。

鬼島達の時には、大磯海岸へ行ったのだったか。鬼島は結構絵が上

手かったから、銀賞をもらったのを憶えている。

どうも、あのいじめの直接の原因は、瓜生がその大会で大賞を取ったことにあるらしい。

だとすれば、その絵を見ることによって何かが分かるかも知れない。写生大会での絵は、美術室に保管されるのだ。そして、放課後、美術室の鍵は職員室に保管される。

「失礼します。美術室の鍵をお借りできるでしょうか」

「ん？ 鬼島君か。何に使うの？」

「いや、ちよつと美術室内に忘れ物をしてきてしまったかも知れないんで」

「おー、そうか。なら、そこにかけてあるから、勝手に持つてきなあとで返せよ。それより君、最近ますます優秀じゃないか。特にこの間の」

「では、失礼します」

あの数学教師は話し出すと長い。だが、今はあいつと話しているヒマはないのだ。

美術室の鍵を開ける。教卓の隅に「平成○○年度写生大会」と書かれたダンボール箱があった。中を開ける。丁寧に、絵一枚一枚の間にわら半紙が入っている。

画用紙の裏側には、学年・組・名前が入っているから、それを一つ一つ見ていくしかない。ダンボール箱から絵を一枚ずつ取り出していく。

「……あつた。瓜生忍。多分これだ」

積み上げられた絵のちょうど真ん中当りに瓜生忍の名前があった。鬼島はそれを裏返してみて、ちよつと驚いた。

あまりにも、下手くそだったからだ。多分、崖の上に生えている松の木を描こうとしたのだろうが、並の小学生よりもひどい。

鬼島は、それなりに美術史の知識があるから、必ずしも写実的な

絵ばかりをもてはやす時代はとくに終わっていることは知っている。絵の具をキャンバス上でぐちゃぐちゃに練り合わせただけのものや、赤ん坊の落書きのように何を書こうとしたかすら分らない絵画が、高い評価を受けることもあるのだ。

だから、そう言った意味では瓜生の絵も、素晴らしいと言えるのかも知れないが。

少なくとも、学校の写生大会で賞を取るような絵ではない、と思う。

鬼島は画用紙の束を急いでダンボール箱の中にしまつと、駆け足で職員室に向かった。

「失礼します。美術室の鍵を返しに参りました」

「おう。結構時間がかかったな。捜し物はあったか？」

「はい。おかげさまで」

「じゃあ、そのフックに掛けといてくれ」

「ところで、一年生の美術担当の遠藤先生はいらっしゃるでしょうか？」

「遠藤さんか。おい、遠藤さん、生徒が呼んでるよ！」

数学教師が大声でそう叫ぶと、小柄なおばさんが職員室の奥からパタパタと駆けてきた。生徒会役員をやっている鬼島すら、この遠藤には数えるほどこしか面識がなかった。担当の学年が違つと、必然的にそうなってしまうのだ。

「なーに？ 生徒会の鬼島君じゃない。何か用？」

むこうは鬼島の名前を知っていたようだった。

「ひとつ、つかぬ事をお尋ねするのですが」

「つかぬ事？」

「例の、写生大会で誰に賞を出すかつてことは、どうやって決めているんですか？」

「ああ。あれね。やっぱり不自然なところ合つたかしら？」

「とも思ふんですけど」

「どうしても、どうやって評価したか知りたい？」

「できれば」

「本当は、生徒に教えるのはまずいと思うんだけどなー。でも、鬼島君イケメンだから教えちゃおうかしら」

おばさんにイケメンといわれて鬼島は身震いしたが、何とか表情には出さないことに成功したようだ。

「そもそも、学校の教科としての美術で、生徒に評価を加えるって言うのは、非常に難しいってことは、分かるかしら」

「なんとなく、分かります。例え友達と喋りながらふざけて描いた絵でも、素晴らしいものは素晴らしい。血のにじむような努力をして描いた絵でも、どうしようもないものはどうしようもない。ただ、学校の先生としては、努力して描いた方にいい成績をあげたい。しかし、芸術家という立場から見れば、評価は真逆になる。そう言うことでしょう」

「そうね。そうした問題もひっくるめてだけど、最終的に、作品の評価の基準は、教師の主観になる。どんなに客観的になろうとしても、主観を排除はできないわ」

「では、今回の写生大会の評価も、あくまで先生の主観だと？」

「いや、そうでもない。言いづらいことだけど、ソフトウェアがあるのよ。『芸術作品を客観的に評価する』ソフトウェアがね。もちろん、学校の教師用につくられたもので、一般には出回っていないけれど」

なんだって。そんなソフトが開発されてたなんてことは、ニュースでも言っていないかったし、新聞にも書かれていなかったぞ。

「驚いてるかしら？ 結構有名だから、知っているかと思ったわ」

「メディアで流れてますか？ その情報は？」

「いいえ。ただ、教師の間では有名なソフトだから」

美術作品の評価をコンピュータにゆだねるということは、問題ではないのか。マークシート式の試験とは、分けるが違うんだぞ。

「……それで、どうやって使っんですか。そのソフトは」

「入力は簡単よ。例えば『画用紙の隅々まで絵の具が塗られていま

すか?』というような質問に、五段階で答えていくの。完璧に塗られていれば『5』、やや塗り残しがあれば『3』というようにね」
「そうやって入力していつて、生徒の作品をランク付けするんですね」

「そう。膨大なマニュアルがあつて、それを憶えるのには苦労したわ。でも、憶えてしまえばかなり仕事が楽になるわ」

「それで、そのソフトウェアで出された結論は、正しいんですか」

「わたしも、最初は疑問に思つて、何度も作品と結果を見比べて吟味したわ。でも、ソフトウェアのはじき出した答えは、完璧に正鵠を得たものだった。だから、今はもうソフトウェアを信頼している」
「一度も間違つた評価を下したことはない、と?」

「そうね」

「本当に?」

「……そう言えば最近……」

「最近? 何です」

「いいえ、何でもないわ。さあ、それよりももう遅い時間よ。さつさと帰りなさい」

「……分かりました。お話、ありがとうございます」

鬼島は頭を下げると、職員室から出て行つた。

多分、瓜生の作品が賞を取つたのは、そのソフトウェアのエラーだ。一番高得点の作品に、機械的に賞を与えてしまつたに違いない。実際に、絵と打ち出された結果を見比べずに、だ。

遠藤がさつき口ごもつたのは、多分、授賞式の人に瓜生の絵を改めて見て、愕然となつたからではないのか。ソフトウェアのはじき出した結果と違いすぎる、と。

だが、今更受賞はなしでしつたと言つことはできない。だから、彼女に賞を。なんて愚かなんだ。

だが、あのいじめの原因は、それだけが理由ではないはずだ。もっと深い何かがある。明日、それをいじめている張本人に聞いてみ

る必要があるな、鬼島は思った。

翌日の昼休み、鬼島は1年5組の教室へと向かった。そのクラスに瓜生と、彼女をいじめている幾人かのメンバーがいるはずなのだ。教室の扉を開けたが、瓜生の姿は見えなかった。だが、昨日瓜生を囲んでいた、あの金髪の女が、友達とお喋りしていた。彼女の名前も調べてある。

「小田さん」

横から話しかけると、彼女は振り向いて、驚いた顔をした。

「あんたは、昨日の……」

「そう、2年4組の、鬼島だ」

「なーに、なんか用。昨日のことであたしに文句つけるなら……」
「昨日のことに関係しているが、別に文句をつけに来た分けじゃない」

「ならなーに？」

「瓜生さんがいじめられる原因さ。何かあるだろ」

「あつたら、何だつてんだよ」

「いや、実際君、本当は結構優しい子なんじゃないのか。少なくとも、今話した感触だと、そう思えるんだが」

「……なんだよ」

彼女は少し、顔を赤らめたようだった。

「そんな君が、瓜生さんをいじめるのには、なんか分けがあるんじゃないのか？」

「ないわけ、ないだろ」

「それを教えてくれ」

小田は鬼島の胸元を見ながら、喋りはじめた。

「あの子は、元々あたし達の友達だった。頭はあたしより悪いし、運動もできない。でも、仲は良かった」

「それで？」

「でも、あの子、友達のひどい悪口を書いたメールを大葉さんの所

に送りつけたんだよ。わたし達の親友の悪口をさ」

「大葉さんていうのは、あの美人の？」

「そう」

「何でそんなことを？」

「知らねーよ。それで、あいつは許すなっでことさ……」

山崎はため息をついた。そんな、人の悪口なんて誰しもが心の中で思っていることじゃないか。それがたまたま、出てしまったただだ。

「それだけで、あんなに酷いことをするのは可哀想じゃないか」

「うるせーな。女には女の仁義の切り方があんだよ！ あんたにとやかく言われる筋合いはねー」

「そうかい。とにかく、もう少し冷静にね……」

そう言い残して、鬼島はその場を立ち去った。

1年5組の教室を出ようとしている時に、誰かにぶつかった。

それは、瓜生だった。

「何をしてるんですか、こんな所で！」

「いや、ちよつと小田さんと話をね……」

「昨日のことでしたら、余計なことしないでっでいったでしょ！」

「いや、俺は生徒会役員だ。生徒全員が楽しく過ごせるように努めるのも、俺の役割だ」

「……」

「聞いたぞ。メールの話し。誠心誠意謝ったらどうだ？ そうすれば、あいづらだっで」

「わ、わたし、そんなメール送ってないもん！ 大葉さんには、送ってないもん！」

「何だっで？」

鬼島は家に帰ったあと、自室で瓜生のいったことを整理してみた。瓜生は、確かにその人物の悪口をメールで書いて、別の友達に送

ろうとしたのだそうだ。

しかし、思い直して、メールを破棄しようとした。

だが、何の手違いか、携帯の方が勝手に働いて、大葉にそのメール全文が送られてしまったのだそうだ。

多分、操作ミスだろう。だが、一応確認しておくことがある。

中学時代からの後輩に、コンピュータ関係にかなり詳しい奴がいる。鬼島は携帯を握ると、そいつに電話をかけた。

「ああ、もしもし、葛城か？」

「鬼島先輩、何か用ですか？ 俺はUFOの研究で忙しいんですが」「そんなこといつでもできるだろ。それよりさ、少し聞きたいことがあるんだが。変なことだぞ」

「何です？ 変なことなら大歓迎だ。UFOのことですか？」

「現在のコンピュータが、意識を持つことは可能か？」

「……、それは難しい問題ですね。それにはまず、意識とは何か、ということについて考えねばなりません。結論から言えば、俺は不可能だと思うが。話せば長くなる」

「じゃあ、質問を変えよう。意図的に、携帯電話を誤作動させることは可能か？」

「どのように誤作動させるんですか？」

「例えば、メールを目的の人物とは別人に送信させてしまう、とか」

「……、ある種のウイルスを使えば、可能でしょう。しかし、そんなウイルスは聞いたことがないな」

「では、携帯電話の電子頭脳自身が、意図的にそうすることは？」

「不可能です。携帯電話に『意図的に何かをするようにみえる』程度の演算能力はない」

「では、例えばパソコンや、もっと大型のコンピュータにそういう能力はあるかな」

「ありえません。そもそも『意図』とは人間とそれに似た生物特有の能力です。現在のコンピュータシステムに、『何かを意図』する

能力はない。「何かを意図しているようにみえる」能力ならあるかも知れないが。ただ、それも人間がそうなるように設計しただけで、『意図する』という行為自体は出来ない」

「成る程。では、最初の問いに戻るが、コンピュータに『意識』はないんだな」

「少なくとも、人間と同じ様な『意識』はないと思います。コンピュータと人間の脳は仕組みが違いすぎる。コンピュータは能力の劣る人間の脳ではないし、逆に人間の脳はコンピュータを何倍も複雑にしたようなものではない。両者の間には断絶がある。コンピュータはしよせん計算機です」

「だが、人間とは別な意味でなら、意識がある可能性はあるのか？」
「例えば、広大な宇宙には人間とは異なる知性体が、存在しているかも知れない。その中には、地球型コンピュータのような仕組みを持つているものもあるかも知れない。」

「だから、原理上人間はぜったに気がつくことができないが、コンピュータにも『意識』がある可能性はある」

「難しいな」

「たとえば、コンピュータが何らかの意図を持って行動しはじめるとしても、それは人間には理解できないでしょう。だから、考える必要はない」

「成る程。実はお前、かなりの常識人だな。普段の奇行からは想像もできないぞ」

「常識がないものに、常識の限界を超えることはできませんから」

「ふん。そうか。わかった。ありがとう」

「それじゃあ、用が済んだのなら失礼しますよ」

「ああ」

鬼島は電話を切った。

「どうやら自分の取り越し苦労だったようだ、と安堵のため息をつく。」

瓜生に対するいじめがみえざる力によるものでないのなら、解決

できるに違いない。

しかし、最悪の結果が待ち受けていた。

鬼島が小田と話した一週間後、瓜生が自動車事故で死んだのだ。

どうやら、瓜生は学校での苦しみから逃れるために薬物に依存していたらしい。

それで、もうろうとする意識の中町中をうろつき、車に轢かれた。

それで、鬼頭の日常に亀裂が走ったわけではない。だが、ショックだった。そしてやはり、瓜生がいじめられていたのは、誰かの意図したものだったのではないかと。

社会学的自然淘汰、という言葉があるらしい。自然界の生物が、環境に適応したものだけが生き残り、そうでないものが死んでいく、その積み重ねによって進化していくそれを自然淘汰と呼ぶ。その自然淘汰の原理を、人間社会に当てはめたものだ。

すなわち、社会的に優秀なものだけが生き残り、そうでないものはのたれ死ぬ。優秀なものだけが子孫を残す。それによって、人間の文明はより発達していくのだ、という意味だ。

だから、知能の低いもの、使い物にならないぐらい精神を病んでいるものは、文明の発達を阻害するゴミだ、とそう考える連中もいる。反吐を吐きたくなるような考え方だが。

そして、瓜生の学校の成績は悪かった。人間関係も下手くそだった。そんな人間はいらない、そう考えた奴がいたとしたら。

そして鬼島は思う。そう考えたのは、コンピュータの中に芽生えた、人間と同じような意識体なのではないかと。

葛城は、ありえないと言った。だが、鬼島は戦慄する。

コンピュータを使うのは人間だ。人間が何かをインプットして、

そのアウトプットとして何らかの反応を示す。いわば、光を反射する鏡なのだ。その鏡には、必ず人間の姿が映っている。

だから、その鏡像の方が意識を持って、逆に人間の世界に働きかけてきたとしたら。そして、その鏡像が、社会学的自然淘汰などという歪んだ思想を反映させたものだとしたら。

「はっはっはっは、馬鹿な。考えすぎだ。妄想もいいところだ！

それこそありえない。偶然が重なっただけだ。はっはっはっは……」

鬼頭は一人、大声で笑った。

だが、この時鬼頭が考えていなかった、より深刻な可能性もある。

コンピュータが、人間には全く想像を絶する論理によって、瓜生を追い詰めていったのではないか、という。昆虫が死んだふりをする意図が、人間には分からないように……。

（後書き）

いかがだったでしょうか。ちょっと暗すぎたり、内容が抽象的すぎますでしょうか？しかし、読んでいただいた方、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2097l/>

それは、意図的だったか

2010年10月8日15時07分発行